

青年リストとロイトリンゲン

小 林 昇

一

フリードリッヒ・リストの生涯、ことに彼が一八二五年にホーエンアスベルクの牢獄からアメリカに追放されるまでの初期の伝記的事実については、これまで明らかでない部分が多かった。そのなかでおそらくいちばん大きい重要性を持つ点は、リストが一八一九年にテュービンゲンからフランクフルト・アム・マインを訪れて「ドイツ商工業同盟」の指導者となったいきさつであり、彼の領邦国家的視野が全ドイツ的視野に、また彼のヴュルッテンベルク人としての政治的・経済的関心がドイツ人としての国民経済的関心に飛躍する過程であるが、それはこんにちでもまだ史料に跡づけられていない。しかし、ヴュルッテンベルク憲法闘争（一八一五—二〇年）の渦中にあつてそのもっともラディカルなエネルギーとなった青年リストの事績については、テュービンゲンのゲーリンク教授の大冊、すなわち Paul Gehring: *Friedrich List. Jugend-und Reifejahre 1789—1825*, 1964 によつて、有力な新資料の発掘をともないつつ、さまざまな点が明らかとなつた。⁽¹⁾ことに、リストはドイツ商工業同盟の運動と並行しつつ、ヴュルッテン

ベルクの新しい領邦議會に登場して、短期間ながら一般市民層 (Bürgerschaft) の代表者としてきわめて精力的かつ急進的な活躍を示し、それが彼への官権の迫害の直接の原因となるのであるから、彼の全ドイツ的視野は彼のヴュルッテンベルク人としての活動と本質的には矛盾しなかったわけであり、ここから、青年リストの政治・社会思想と、それにもとづく行動とを解明することの意義もまた確認されるのである。⁽²⁾

しかし、右の対象へのゲーリンク教授の執拗な追求も、まだ大きい空白の部分を残していた。すでに一八〇五年に故郷の旧帝国都市ロイトリンゲンを離れて、十代から領邦の書記 (Schreiber) の階層にはいり、やがてテュービンゲン大学に学んでは会計官となつて、シュツットガルトの中央官界で影響力を発揮し、つづいて出身大学の教授、「商工業同盟」の指導者というふうに、つぎつぎに飛躍をかさねた青年リストが、「同盟」の仕事で多忙をきわめた一八一九年の七月に、現地でわずか一日の選挙運動で、王の憲法草案の議決を目的とする領邦議會のロイトリンゲン市からの代議員に選出されたこと、この選出が年齢不足で取消されたのちに、一時の挫折のちに二〇年の末にはふたたび目的を達成してやはりロイトリンゲン市代表の席を新議會に獲得したこと、しかもやがて従来のみずから憲法闘争の立場をいちだんと急進化させて、ロイトリンゲン市民の要請を容れた請願書を書き、あえて没落への道を歩んだこと、すでに一八年にカロリーネ・ナイハルトと結婚して以来ロイトリンゲンに住む自分の一族との関係も遠くなつていたリストが、それにもかかわらず故郷との関係をこれほど深く保っていたこと——すべてこれらの事実の理由がどこにあるかは、ゲーリンク教授の大著(以下『若きリスト』と略称)⁽³⁾によつてもなお、いなむしろかえつていよいよ、疑問とされていたのである。「静かなロイトリンゲン」と、久しくそこを離れてはげしい努力と闘争とを送つていた青春のリストとのあいだには、いったいどういう関係があつたのであろうか。

だが、『若きリスト』は、この疑問を解く鍵をあたえていないわけではない。すなわちその第三章には、「ロイトリングンにおける討議、一八一六年前半。帝都都市民リスト」と題した小節があって、その冒頭にはつぎのように記されているのである。——一八一六年の春に、個々の点はまだ不明だが、ロイトリングンに問題がおこり、市の行政制度への中央政府の介入がおこなわれた。このとき政府は派遣弁務官(Kommissar)としてリストをその故郷の町へ送り、リストはそこで市当局者たち(Magistrat)と討議をおこなった。この討議の(所在不明の)調書はリストの手から、彼の母に酷い仕打ちを加えた郡長官(Oberamtman)のファイエル(Johann Gottlob Veiel)に手交された。ファイエルはこの調書と、その他の書類とを、ロイトリングンにいた会計弁務官(Rechnungskommissar)シュトライヒ(Streich)の手を経て、シュッツトガルトにもどったリストにわたし、リストから求められた回答を右の書類をつうじてをおこなうこととなっていた。これにもとづいて中央官庁へのリストの報告がなされたはずであり、その結果が、一八一六年六月七日の内務省の訓令(Lists Werke, VIII, S. 38)であって、それは同月の十六日に郡庁に届いている。この訓令によれば、ロイトリングン市政の改善を目的として現在進行中の討議に、各ツンフトの長が諮問されることを求める権利があたえられたが、討議そのもののへの彼らの参加は拒否されている。そうしてゲーリング教授によれば、それは「人民の声」をツンフトの長をつうじてはっきりと示そうとしたリストの努力が、意図の一部分だけながら達成されたことを意味するものであった。⁽⁴⁾

ここに、青年リストとロイトリングンとの関係が、埋没しながらもその一端を現わしている。しかしそれはわずかな一端にすぎず、『若きリスト』の叙述はここからロイトリングンのツンフトとその古い制約との問題に、また一八〇二年にヴェルッテンベルクの手に帰した同市の苦悩の指摘にすぎず、それは生彩のある有益な叙述であるけれど

(5) リストの伝記としては主人公の行動を離れた部分を成している。そうしたあとで、この大著はつぎのように述べた。「事件の終末はあまりはつきりしない。とはいえ、リストによるこのロイトリンゲンの委員会が、ロイトリンゲンの市民層のその郡長官ファイエルに対する闘争の開始と関連を持つことは、まずたしかである。この闘争は（一八一七年二月十四日に王にあてたロイトリンゲンの『諸市民ツンフトと大親方と〔bürgerliche Zünfte und Obermeister〕の委員会』の請願書によれば）、自治体規則に定められているゲマインデの計理の公開が一八〇三年以来、したがってヴュルッテンベルクへの市の移行以来、中止されていたのちに、ついに『一八一六年の春に』市民層によって切に望まれるにいたって開始されたのであった。リストがシュツツガルトから弁務官としてロイトリンゲンへ派遣されていたのはまさにこのときであり、しかも、彼が別のときに弁務官となった場合から類推してよいだろうが、彼はロイトリンゲンへ救助におもむこうとして、それをあらかじめ内務大臣に申し出ていたはずである。(6)」

右の叙述はまだすこし、推測をまじえてつづき「ロイトリンゲン請願書」(7)のリストと右の運動の展開との関連に言及されて終っている。しかしいまでは、その部分を紹介したり検討したりする必要はない。というのは、『若きリスト』が右に所在不明と書いた、リストを中心とするロイトリンゲンでの討議の調書が、一九六五年になって発見されたからである。発見者は現在ロイトリンゲンの市文書館の Archivrat であり附属のリスト文庫の主任であるシュヴァルツ博士 (Dr. Paul Schwarz) で、発見の場所は同博士がかつて勤務していたことのある、ドーナウの上流に臨むジグマールリンゲンの国立文書館であった。(8) そこには古いロイトリンゲン郡の記録が蔵されているのである。目録の題に「一八一六年、市政の改編」(1816 Neuordnung der Stadtverwaltung) としてそのなかにあるものが、まさしく当面の調書であった。写真によるそのコピーがリスト文庫に加えられたのち、ゲーリンク教授は、ルードヴィ

ヒスブルクの国立文書館所蔵の中央官庁関係の一八一六年の多くの文書をも利用しつつ、右の調書の解説的な紹介を論説として発表した。それは *Reutlinger Geschichtsblätter*, 1967 (Oberbürgermeister Oskar Kalbrell の七十歳の記念号) に、Friedrich List bei der Neuordnung der Reutlinger Stadtverwaltung (1816—1819) と題して載せられた、四八ページ(本文三八ページ、補注八ページ、付録二ページ——新発見のリストの書簡一通をふくむ)から成る労作である。

わたくしは以下に、『若きリスト』の補遺として書かれた右の論説をやや詳しく紹介し、つづいてそれに若干の説明を附加するであろう。はじめの紹介の部分が詳しいのは、当の論説の対象が旧い制度のもとにある小都市の財・行政の実態にかかわる点を多く持ち、だからそこでの細叙はわれわれ学史の研究者にとっては理解のために大きい時間を費やさせるものであるが、この負担はひとまず、紹介者がひきうけておけばよいものであらうと判断されたからである。だが論説のこういう叙述は、もとより、紹介者自身にとっては理解に困難な点(ことに制度上・慣習上の諸名称)をいくつもふくんでいる。わたくしはゲーリンク教授ないしシュヴァルツ博士にそれらの点を訊ねるいとまがなくこの小稿を書くものであることをおことわりしておかなくてはならない。⁽¹⁰⁾

(1) 筆者著『フリードリッヒ・リスト論考』、第二論文を、参照。当面の大冊に対するわたくしのこの紹介論説の省略のないドイツ訳は、すでにゲーリンク教授による詳細な検討を受けた。そのなかで新資料のことについていえば、一八一七年にリストの書いた「ヴァルデンブーフ上申書」の写しを、「史家ヘルツレの手でたまたま発見され」とわたくしの書いたのは正確でなく、ヘルツレの報告にもとづいてゲーリンク教授がシュツットガルトの州立図書館で文書を調査した結果、それがリストの重要な新資料であることが明らかとなったものであることを、教授のわたくしあての手紙は指摘している(なお、vgl. Gehring, *Fr. List*, SS, 136—37)。またもとより、教授の大著はラディカルな面でのリストについてだけでなく、青年リストの伝記

的領域での発見にみたまはれているが、とくにチュービンゲン大学教授だったリストについての叙述は詳細である(4. Kap.)。しかもその後、教授は右の叙述を『小論考 Friedrich Lists Aufnahme in den Senat (Heimathundliche Blätter für den Kreis Tübingen, Dez. 1966)』によって補完している。ちなみに、この点についての教授の研究は、従来のリスト伝説の一つであった、大学の同僚たちのリストへの迫害と国家経済学部長フルダのリストに対する陰謀という事実をいちおう否定できたためか、ちかごろになってようやく、チュービンゲン大学では旧教授リストの——すでに一九六四年以来きざしのあった——復権(筆者著、上掲、付録二、「リストの記念祭」を参照)が確定したようである。同大学経済学部の経済史の教授ボルン氏の新著『Karl Erich Born, Geschichte der Wirtschaftswissenschaften an der Universität Tübingen 1817—1967 1967』(『チュービンゲン大学における経済学の歴史』)は、重要人物の肖像・写真の最初にリストのものを掲げ、カヴァーの広告の冒頭には、「この本は、もっとも早くから継続的なものとして存在し、その創設者の一人がフリードリッヒ・リストであった、経済学の教育組織の成立と発展とを描くものである」としている。

(2) 金子武蔵・上妻精両氏の訳に金子氏の長大な解説を加えた、ヘーゲル『政治論文集』(二冊、岩波文庫)は、ヴェルッテンベルク憲法闘争に光をあてるうえで、また間接的にはその渦中にあつたリストの思想を把握するためにも、すくなくらず有益である。ヘーゲルの政治思想についての研究としては、内田忠男氏の「ヘーゲルとイギリス国家」(『経済科学』十一ノ二)、「初期ヘーゲルの研究」(同上、十三ノ一)の二論説も、間接にながら初期リストの理解のために有用であらう。

(3) Vgl. Carl Brinkmann, *Friedrich List*, 1949, S. 19. しかしロイトリンゲンが静穏ではなかったことを、われわれはつづいて知るであらう。

(4) 以上 Vgl. Gehring, *Fy. List*, ss. 86—87.

(5) この叙述についてはあとでふれるつもりである。

(6) Gehring, *ibid.*, S. 92.

(7) ちなみに「ロイトリンゲン市民の要請を容れた請願書」と書いたもの。"Reutinger Petition", 1821.

(8) ジグマーリンゲンのあたりは、ホーニンツォルレン家の故地である。

(9) 当の論説は、小節の小見出しのつけかたも、後注のつけかたも、『若きリスト』とおなじである。

(10) わたくしはその後ゲーリンク教授にいくつかの質問を書き送って回答を得、校正の段階で一部はそれに従った。しかし質

間に残した諸名辭、たとえば Eiler(s) という固有名詞などはさしあたりは不明のままでいたしかたがないとした。もとより、読者から御示教がいただければたいへんありがたい。

二

リストはテュービンゲン大学では三年間の勉学期間を経てから、一八一四年九月に上級書記の国家試験に合格し、年内にネッカーの上流の町ズルツに郡駐在弁務官 (Oberamts-Kommissarius) としておもむいてズルツ請願書を書いたりしてのち、一八一六年にはシュットガルトに出、各種の調査や報告を果たしていたが、五月には正規の会計官 (Rechnungsrat) に任ぜられて新設の官庁に配置され、やがてこの年の末には憲法闘争の舞台での重要人物となり、短期間ながら激しい活動を展開することとなる。そうして、リストが中央政府からロイトリンゲンに派遣されて正式の活動をしたのは、会計官に任ぜられる直前、すなわち四月二十二日から三十日までのことであった。

さて、ロイトリンゲンが一八〇二年に帝国都市の資格を失ってヴュルッテンベルクに属するようになると、ただちに最初の郡長官ザットラー (Dr. Friedrich Sattler) が、国から任ぜられてロイトリンゲンにはいった。⁽¹⁾ やがて、この国に特有のものであった書記制度 (Schreibereiverwaltung) がここにも確立されて、⁽²⁾ ファイエルが一八一〇年に郡長官となるころにいたると、市のなやんでいたさまざまな問題が表面化してきた。ツンフトを中心とする古い制度は廃止され、市長および市政の当局者たち (一括して Magistrat と呼ばれる) は国から終身職に任ぜられたが、郡長官は警察力と裁判権とにおける優越をつうじて市当局よりも上位にあった。また市の書記職 (Stadtschreiber) は、地域の関係者から選ばれたが、これも国に任命された職であって自治体への奉仕者ではなく、郡長官とたず

さえて新しい支配機構をつくっていた。この事態はロイトリングンの市民にとってはつらいものだったので、市民層および市当局と郡長官とのあいだの対立は、前二者のあいだの副次的対立をふくみつつも、しだいにきびしいものとなった。それに加えて、郡長官ファイエルは平衡を欠いたかたくなな性格であって、いちじるしい越権的暴力行為のために二度も罰せられたことのある人物であった。リストの兄、父、母のあいづく死にも、ファイエルはみずからの苛酷な措置に対する責任を負うものである。⁽³⁾

このファイエルはすでに、一八一三年に、市の計理の検査を怠ったために中央の自治局 (Kommunalsektion) から罰金を課せられるにいたった。すでに一八〇五年以来、計理の帳簿は作成されず、市当局で可決されることもなく、自治局に提出されてもいなかったのである。自治局の長官ブライトシュヴェールト (Statrat von Breischwert) はさまざまな手段をつくしてファイエルに義務の遂行をせまったが、後者は助手を請求したのち、一五年の末にようやくこの助手の手になる事務報告書に自分のまえがきをつけて自治局に提出した。ところがファイエルの親類であった右の助手が報告書提出の直後に死に、その仕事もきわめてずさんだったことがわかったので、翌一六年のはじめに開かれた自治局の会議では、事態の急迫が確認されるとともに、助手の死を好機として郡長官から独立した委員を派遣し、根本的・計画的な対策を立てることがきめられた。そうしてこの目的のために、郡書記の資格 (Oberant-Aktuar) を持ち、すでにその報告書等によって能力を知られ、ロイトリングンの出身でもあるリストが、適任とされたのである。自治局は一月三日付けの訓令で、ロイトリングン市の計理制度の調査とそれについての提案との権限をリストにあたえるときともに、郡に対してはリストの指導のもとに「全行政と計理の運営と」に秩序がもたらされるべきことを通達している。

しかし、リストが現実にロイトリングゲンで仕事をはじめることができるようになるまでには、さまざまなトラブルがおこった。それはファイエルが内務大臣のライシヤハ (Graf Reischach) に私信で不満を述べたことにはじまり、リストは一時、さきの任命をあきらめるといふ事態になったが、自治局の方針と態度とは変わらず、リストはともかくも二月九日にはロイトリングゲンに着任して、まもなく長大な報告を自治局に送り、その成果は三月に入ってから政府に伝えられている。しかも自治局はリストのこの報告の内容を高く評価したのであった。ところが、このあとで内務省の態度が変わって、ライシヤハは三月二十三日にブライトシュヴェールトに対し、当面の件にかんする自治局の訓令のすべてを認めぬことを通達してきた。この通達の内容は、ファイエルを擁護しリストを非難するものであって、前者の運動の成功を物語っている。だがこれに対してブライトシュヴェールトは、自分の所信を守りつつ、ロイトリングゲンの事態が放置できぬことを述べ、暴動のおそれもあることを指摘した。

このあとにも政府当局間のやりとりがつづいたが、四月十八日になって、自治局は政府の諒解のもとに二つの訓令を出すところまでこぎつけた。その第一のものは、リストとファイエルとの同格を前提としながら後者に上席をあたえ、これまでのリストの態度を非難しているが、それだけの代償で一月三日の訓令はふたたび認められている。その第二のものはロイトリングゲンの郡庁、市当局、およびリストにあてた詳細な指示であって、その内容は、右の三者で市政改良のプランを検討すべきこと、リストは提案をおこない、報告書はファイエルとリストとが共同で書くべきこと、リストは市の計理文書の形式の簡素化をはかり、その範型を示すべきこと、リストの助手シュトライヒの資格が公的に確認される必要のあること、などをふくみ、さらに、市の書記職の計理上の権能と収入との保証がおこなわれるとともに、一方でこれに対してリストたち三者には、右にかんする実態の報告、書記職の収入表の提示、市の収

入・支出および財産・負債の確定などが求められている。すなわち、この訓令ではリストたち三者には審議と報告の作成との権限だけがあたえられ、政府と自治省とが決定権を確保することとなったのであった。

すでにやや久しくロイトリンゲンで実地に活動をつづけていたリストは、この訓令で最終的にその地位をかため、郡長官、市当局者たち、リストの三者の討議は、一八一六年四月二十二日（月曜）から開始された。市当局者たちの中心は *Bürgermeister* の Wunderlich であった。⁽⁵⁾ この討議は同月の三十日まで、ときには朝七時から夕刻までつづけられたが、二十五日の裁判日と日曜とは休んだから、正味七日間おこなわれたわけである。市当局者たちは個々にしばしば中座してリストを怒らせたが、ヴンダーリッヒはつねに出席して積極的に論議に加わった。そうして、討議についてのこのような事実と、とくにその詳細な内容とをわれわれに知らせてくれるものが、ジグマーリンゲンで発見された文書なのである。

だが、討議の最初の部分の内容は、郡長官ファイエルの行動とあわせて紹介されなくてはならない。ファイエルは上席に坐して会議を開き、まず四月十八日の自治局の訓令を読ませてからリストにうながされて七つの議題を示した。それは、一、会議の運営のためにきめておかなければならない案件、二、委員会の、仕事のプラン、報酬、必要な人員、三、計理と検査との遅滞についての処置、四、市政の内部組織、五、計理事務の組織、六、市の諸事務局と事務の運営との組織、七、負債支払計画の立案、である。これに対してファイエルは、リストが右の七点にかんして詳細に解剖し、それを文書にして市当局者たちに回覧させようとして発言し、リストはそれに反駁して、四月二十日の（未発見の）訓令を示しつつすぐに討議をはじめたことを要求した。リストによれば、約九万グルデンの市税と約二万グルデンの国税との未収を処理することがきわめて緊急であり、派遣弁務官としての彼の義務は

「結局は」ここにあるのであった（ここではまず国家官僚としてのリストの立場が示されている）。そうしてこの目的のためには、右の議題の三、五、七がすぐにも討論されなくてはならないであろう。だが、リストとファイエルとのあいだの対立は容易には解消しなかった。リストは（シュトライト以外に）未回収金取立ての事務にキーフス（Kieffus）を推薦して中央政府がかねて持っていたこの点での懸案を解決できただけで、翌日も会議をつづけることを提案したが、ファイエルはその日がふさがっているといい、別の日をといて提案には事が急を要しないと答えた。リストがその答えを調書に記入させようとするとファイエルがおしとどめたので、リストはみずからのペンで記入しようとし、これに対してファイエルは自分の口述を書くように求めた。リストが反論しようとしたときにファイエルはいそいで退室し、以後の会議には二度と出席しなかった。リストは両者の討論を記録して、市当局者たちに読み聞かせ、自分に越権のなかったことを確認させた。⁽⁶⁾

（１）ロイトリンゲン市はロイトリンゲン郡の東北隅にあたるが、同市内に郡庁がおかれたのである。

（２）書記制度は新憲法成立以前のヴュルッテンベルクに特有のものであった。それはローマ法にもとづいて行政と司法とにあたることとなった地方行政官が、補佐役として実務家を必要としたことからおこり、こういう「書記」がしだいにのおのずから税務、登記、裁判、婚姻等にかんする書類を取扱うことによって、行政の実務を独占的に掌握する階層になった。しかも彼らは、すすんで市長や裁判官をその実力のもとにおくにいたり、各方面から旧等族議會（Ständeverammlung）に進出し、その幹部の勢力とからみあった。本文に後述のように、書記はその作成する書類の量をいたずらにふやしてそれに対する報酬を要求し、民衆を搾取して、ことに上級書記の収入は莫大であった。ヴュルッテンベルクはこの制度を、一八〇三年以来の新版図にも拡充したので、その部分の民衆の苦しみはことに大きかった。旧帝国都市に生まれたリストは少年期にみずからこの書記身分に投じたのであったが、おなじくあらたにヴュルッテンベルクに所属した古都ウルムにいたときに、自分の職業の反民衆的な性質をとくにつよく知ったものとおもわれる。故郷のロイトリンゲンからの連絡も、つねに受けていたことであろう。

だが反面、末端の書記はともかくもつねに民衆と接する地位にあったから、若年のリストの体験は彼の生涯を養いつづけてもいるのである。書記制度についてのドイツでの研究文献はもとより存在するが、わたくしは遺憾ながらその検討を果たしていない。上掲の、ヘーゲル『政治論文集』(下)の解説、とくにその三〇八一—二〇ページを一見されたい。なお、郡庁と書記職とも密接なかわりがあった。

- (3) 姉たちの多かったリストのただ一人の長兄ヨハンネスは、リストの最初のテュービンゲン大学時代の一八一三年三月に、奇禍に遭って死んだ。彼は新規の徴兵以前に結婚して徴兵を免れようとしたが、郡庁はその手続きのためにヨハンネスがシュツットガルトとのあいだを短時間で往復することをしたため、彼は帰途に落馬して亡くなったのである。家職の革なめし業を継ぐはずであったこの長兄の急死は、すでに久しく病んでいたリストの父に打撃をあたえ、彼もまた十月の末に生を終っている。リストの母の死はいっそいいたましいものであった。多くの娘たちをかかえたこの老寡婦は、リストがズルツに在任していた一五年の春に、ほんとうは彼女の後見者の責任に帰せられるべき、ほんのささいな命令不履行のかどで、役所に引き出されて大衆の前でこのうえなく酷い仕打ちを受けたのであった。このとき、ヴュルッテンベルクの書記職は、この老寡婦から「くそいまいましい帝国都市の思いあがり」を取り除いてやるつもりなのだといっている。リストの母はショックのために家に連れ帰られなければならなかったが、明らかにこのことが原因でまもなく亡くなったのである (vgl. Ludwig Häusser (ed.), *Friedrich List's gesammelte Schriften*, I, Teil, 1850, SS. 5—6)。彼女の死亡の原因は公式に「神経のショック」となっている (Gehring, *Fr. List*, S. 67)。この事件に対するリストの痛憤は彼が紙片に書き散らしたものからも知られるが、すでに経験をつんだ社会人として、「国土の禍い」である「書記と役人」に対する社会的な闘争の意欲がこのためにいっそうつよめられたことはたしかであろう。彼はまた私人としても、事件の責任者である役人に糾弾の手紙を送ったはずだと思われるが、この役人が郡長官のファイエルであったことは、上記の罵言が彼のものとして一八一七年に前記の「諸市民ツフトと大親方との委員会の請願書」のなかで訴えられているなどのことから明らかである (*ibid.*, SS. 67—68)。リストはこのようにしてすでにファイエルと闘争していた。しかし注意すべきことに、当面のロイトリンゲンの討議では、リストは自分の私怨を晴らそうとする態度はすこしも見せていない。

- (4) このときのラインシャアあてのリストの手紙(一八一六年一月二十五日、シュツットガルト)が発見されて、ゲーリンク教授はそれを今回の論説に付録の第一として収載した。そこではリストは自分の金づまりを訴えて新しい収入の道を内務大臣に

頼んでいる。

(5) このヴンダーリッヒ(Johann Ludwig W. 1775—1820)は、一八〇三年に市と郡との書記からはじめて ^(b p) Bürgermeister となり、Stadtpfleger と呼ばれている。のちに一八一九年と一八一二年とに、リストに代りあるいはリストを抑えて領邦議会に出た。リストは彼の死後その議会の席を襲うこととなる。

(6) リストとファイエルとの関係は、これで終りではなかった。前述のように、リストは調書をファイエルに手交する。

三

翌四月二十三日の会議では、リストは冒頭に、郡長官の出席を欠いたまま市当局者と準備的 (präparatorisch) に討議をおこなうつもりだと告げ、上記の七つの議題のうちの第二、すなわち委員会の仕事のプラン、報酬、必要な人員の問題を、まず対象にすることとした。リスト自身は当面の仕事に二、三週間かけることを望んでおり、この広汎な仕事の助手として、とくに計理の審査と処置とのために、リストの代理をも兼ねて前記のシュトライトと Bürgermeister ヲンダーリッヒの子ヴンダーリッヒ⁽¹⁾とが、また筆者としてフライシュハウアー (Fleischhauer) がきめられた。リストはこのうちの前二者に対しては、仕事の枚数によってではなくその実際の量によって、また定められた日数に応じて、報酬を支払うという方式を提案したが、書記制度のしきたりをやぶるこの改革は、市当局者側の一致した積極的賛同をえた。こうして、ファイエルを欠いた会議は順調にすべり出したのである。

二十四日は第三日である。第三の議題、すなわち計画の遅滞(というのは市の未収入金および未収入物件)の明確な把握がこの日の午前の仕事となり、基本的な問題が採りあげられた。まず、整理の対象は一八〇五—一五年の期間に限られ、納入された現物、すなわち穀物、ぶどう酒、かしわ材、等々の在庫状況の検査がただちに着手されるべき

ことがリストから発言され、市当局者の側からは、とくに木材の管理(Holzverwaltung)が急務だと述べられた。リストはとくに、一八一五—一六年度のための簡単化された計理様式の範型と計理台帳とを示し、それを従来の市書記のおどろくほど劣悪でひろがりすぎた様式に対比させた。この合理的様式によって計理の内容が整理され明確化されてから、市当局者は、十年間にわたって不可能だったその検査をおこなうべきであることを、リストは市当局者の同意のうちに主張し、後者はこれに対して検査員の構成にかんして発言しつつ、「市民層(Bürgerschaft)が施政を信頼していないから」、市政についての協議のために市民層の代表者の出席が望ましいということまで述べている。ここにはじめて、市民層の要求を市当局者がすすんで代弁したわけである。

この二十四日の午後、会議は第四の議題すなわち市政の内部組織の問題にすすみ、これ以後月曜までは、旧帝国都市とはいっても経済的実力のうえでは一地方都市にすぎなかったロイトリンゲンの、雑多な財政的諸問題が主として論ぜられることになる。わたくしの紹介の筆は、できるだけ簡約を旨とすることにしよう。

毛織物の搗き晒し場(Tuchwalke)⁽²⁾の件。この建物とその内庭とは、所有権が市に、使用权が毛織物業ツンフト(Tuchmacherzunft)にあった。リストによれば、市はこの施設のために建物の維持の費用として年十五グルデンを支出し、ツンフトは使用料として年三五グルデンを市に支払っているが、これは市にとっては不利な契約である。現在の時点ではむしろ、三五グルデンから十五グルデンを引いた二〇グルデンを五分で資本換算した四〇〇グルデンで施設を買却したほうが、市にとっては有利であろうと彼は提案した。この提案に対しては、すでに土曜日にツンフトの同意がもたらされた。白なめし革の搗き晒し場(Weißgerberwerke)も、同様のすじみちでやはり土曜日に二〇〇グルデンで白なめし職の親方組合がその購入を承諾した。⁽³⁾

一日おいた四月二十六日には、つづいて、まず市有の製粉、製材の水車施設が検討された。リストによれば、最良の施設の資本価値が六五〇〇グルデン、他の四つの施設のうちもっとも劣等の小屋が四〇〇〇グルデンに評価された。この最劣等の水車の売却案が市当局者の側から出たが、リストは市が水利の状態を整理してから売却条件をきめるのがよいという意見であった。この売却には中央政府の認可が必要だということも述べられている。製材小屋も、従来用途を変更しないという条件で売ろうということになった。狩猟小屋についても同様である。——*（ぎに、Steigacker と呼ばれる市有地が採りあげられ、これは市当局者側の意向で、土質がわるい土地ではあるし、羊の牧草地として使うために保有をつづけたいということになった。また一般に、市の公共目的に利用できぬ草地や果樹林や空地は売却するのが適当だとされたが、しかし市の将来の拡大と美化とを考えると、市壁に接する家屋や墓域の空地は保留された。リストはさらにすすんで、鷺鳥の池を乾しあげてそこにプロムナードをつくることをも提案した。中世紀的な都市の景観に彼は明るさを入れようとしたのである。*

市の所有する建物はほかにもいろいろあった。そのうちの、一六世紀前半に建てられた僧院と、その附属の建物と、おなじく附属の建築用材小屋（Zimmerhütte）と呼ばれるものとは、その居住用の部分が市の図書館と郡長官の官舎とに使われていたが、その他の部分は一時兵営となったことがあり、市の側ではその再現の希望を捨てていなかった。また実業学校の階下の部分は塩を扱う商人が倉庫として使っていたが、この商人は過去にさかのぼって使用料を支払うべきこととされた。さらに、屠殺場が屠殺業ツンフトによって無料で使われてきたことをリストは指摘したが、市当局者は、ヴェルッテンベルクへの市の編入以後大きい屠殺税がそれまでの使用料の納入を不可能にしたと説明した。しかし討議の結果、ツンフトは市に年十五グルデンを支払うべきことに一致を見た。

討議はさらにすすんで、いまでは意味のなくなりつつある市の防衛施設におよんだ。城門、塔、市壁、稜堡の維持には費用だけがかかる。ことに市壁の内側に積まれている燃料はつねに火災の危険を蔵していた。リストは市の将来の拡大を見越しつつ、市壁をこわして外濠を街路とし、旧い壁の石を新しい建設に用い、かたがたその建設の労役で未納の租税を相殺することを提案した。一部の塔の取りこわしについては同意に達し、それをふくむ新しい都市計画も緒につくこととなった。⁽⁴⁾

討議はそれから、貢租の金納化という重要な問題にはいった。リストによれば、果実やぶどう酒の現物貢租はその取扱いのために数千グルデンの人件費その他を要しており、市場での平均価格にもとずく金納化が実現すれば、そこに大きい節約がおこなわれるはずであった。これに関連して、ぶどう山については、市の所有に属するものの個人への有償での払下げ、ないしは小作料の支払いが提議されたが、市当局者は個人の購入資金が不十分であるとして、売却の実行を将来に延ばして市のぶどう山の資本価格の確定だけが必要と考えた。金納化の問題は、救貧施設へのぶどう酒での貢納の大きい部分を除き、一年間実施してみようという一致した結論が出た。リストの達成は、この点では、右のわずかな例外が残されたり、その後の実施状況が明白ではないとしても、注目に値いしよう。しかも、市が保管することとなるぶどう酒のために支出する諸費用は、市がぶどうの压榨場でぶどう酒をただちに競売することにすれば大いにはぶけるというのもリストの着想であり、市の側はそれをも一年間こころみてみることとなった。

二十七日の土曜日は、早朝から討議が続行された。まず救貧施設の計理にかんする古い貸借関係の明確化を要求してから、リストは不要となっている公有地（アルメンデ）の売却、未利用地での植樹、等の必要を説いたが、ヴンダーリッヒは不要なアルメンデはすでに市民層の利用に供されており、植樹も十分におこなわれていると答えている。

リストはつぎに市有の森林の管理の検討にすすみ、その荒廃の実情を衝いた。ヴンダーリッヒは人民の貧窮と木材の不足のために森の荒れていることを認めたが、森林管理の責任者フックス (Senator Waldmeister Fuchs) は、四年間植付けはおこなわれなかったけれども彼の管理するかしわの苗場が苗木を供給してきたと述べた。リストはこういうことばに満足せず、苗木場は貧しい市民のために用いられるべきことを指摘するとともに、富者に木材取得権を放棄させ困窮者に植樹と伐採とを許すことによって、森林荒らしを防止し木材の値下りを実現しようとした。しかしこの提案には市当局者側はなっとくせず、結局、森林にはいる者のリストをつくって一定の制限内でその行為を認めるということに落ちついた。

ここに果実、麻、野菜の十分ノ一税 (すでに金納化) の徴収方法の合理化、おなじく乾し草の十分ノ一税の金納化の問題が出て承認され、それから街路の舗装費の問題に移って、その徴収をせり、で請負わそうという結論になり、請負の利益が増したときには附加税が予定された。舗装の実情はきわめて不十分であり、その後もなかなか改善されなかったが、委員会はまだこの問題に熱意を示すには至っていない。

つぎは、重要な市民税 (Bürgersteuer) の問題である。リストはそれが貧しい市民を「いちじるしく苦しめている人頭税」であり、もっとも貧しい者も九・二五グルデンを支払っているという事実をあげ、それが一七五八年の自治体規則による基準をいちじるしく上まわることを指摘した。市民層の代弁者としてのリストが、ここにはっきりその姿を示して、市当局者を批判しているのである。ところがロイトリンゲンでは、市民税は財産税 (Vermögenssteuer) と結合しているのが実態であり、しかもそれが市の全租税体系とともに一八〇八年の勅令によって認められていたから、リストの改革の意図はさしあたり実行が不可能であった。しかし、一方リストは上記の自治規則が非市

民である居住者、たとえば徒弟手工業者に居住税 (Wohnsteuer) を課すべきことを定めているのに、ロイトリンゲンではそれがもう久しく実施されていないことを知って、その事実を市当局者に認めさせ、助手のキープスが取立ての実行にあたることになった。

(1) シュトライヒは Rechnungskommissar に、子ウンダーリッヒは Rechnungsgesetzer に任ぜられたのであって、後者の事務内容はわたくしにははっきりしないが、計画の審査にたずさわるものだったようである。彼の任命は、市当局の長を父に持っていても不穩当ではないとされたわけである。

(2) Tuch が毛織物であることは十分に確認したわけではない。したがって Tuchmacherzunft についても同様である。後述の第四節の注(4)の事実からいちおう判断しておいた。松田智雄教授の労作「ヴュルテンベルク王国の産業発展」(同著『ドイツ資本主義の基礎研究』所収)からは麻織物が重視されるようである。——いま手もとにあるロイトリンゲンの小さい案内書 (Schönes lebendiges Reutlingen) に、一八二四年のバイエルン・ヴュルテンベルク関税同盟によってロイトリンゲンの Tuchgewerbe に大きい可能性がひらけ、同市とヴュルテンベルクとに広汎な Streichgarnspinnerei が興隆した、それには機械が用いられたが織布工程はまだ大部分手労働であった、とするしてある (S. 38) のは、明らかに綿紡績業のことであろう。しかし当時の南ドイツでは、十年という時間は大きい変動の時間であった。

(3) 獣皮の白なめし職の親方組合 (Weißgerber-Meisterschaft) の長 (Obermeister) は、当時エンゲル (Gottfried Engel) で、彼はリストの親戚であった。さきにファイエルが中央官庁に対してリストの派遣を拒否するように運動したとき、その大きい理由が、ロイトリンゲンでのリストのこういう親戚関係の存在にあった。

(4) しかし一八二〇年にはまだ、ロイトリンゲンには三十六の塔と二つの稜堡とが残っていた。町の外濠の埋立ては一八二二年にはじめられた。

(5) 市民税が二グルデンにとどまる都市もあることをリストは述べている。

四

同日の討議は続行される。市の借入金について、リストは従来の六分の利子を五分に引下げるか、それとも返済を
実行させてもらうかを、債権者にはかるように市当局者を承知させてから、久しく請求されていない借入金は帳簿か
ら落すように指示した。同時に、「思い出せないほど昔から」利子のはいつていない貸付金をも清算し、各種の慈善
施設への出資が混乱している事態に対しては、古い文書にもとづいて整理をさせることにした。つぎに、市の北をす
こし離れて流れるネッカー川の橋、その他の橋、特殊の坂道 (Steige) の維持費を検討の対象として、リストはそ
れらの維持が国の行政の確立した現在では国の仕事であることを認識させ、ヴンダーリッヒもこの仕事からは手をひ
きたいと述べた。ただ、ブリーツハウゼンに架けられたネッカー川の橋だけは、ロイトリンゲンが古くテュービン
ゲンの帝領伯ルードルフから、対岸のシェーンブーフで燃料や建材などを採る権利を購入したときに、それを実行す
るためにつくったものであったから、市としてはその確保と維持とが必要であった。右の購入は一三二〇年のこと
であり、のちに一五五五年に、はやくシェーンブーフを入手していたヴュルッテンベルクがロイトリンゲンにその権利
を確認していたから、後者はそれを護りつづけようとして来たのである。⁽¹⁾

つぎには市の運搬車⁽²⁾の廃棄が決定し、それから、警察員 (Polizeipersonal) の減員が討議されている。警察員の
維持費は年々二二〇〇グルデンにのぼり、市当局者にとつての懸案であると同時に、中央政府からも指摘を受けた出
費であった。当時には五人の警察員と一人の監察員のほか、別に市門の警備員が八人と彼らの下士が一人傭われてい
たのであり、これ以外になお、国家警察の人員たちが特殊の政治目的で駐在していた。これらの人員のうち、市中の

警察員は農村での租税滞納者を強募したものであって郡庁に属しはしたが、市自体の警備費は市民層と市とを圧迫した。だが、ロイトリングンは大街道筋には位置していなかったから、市門をおとずれるよそ者はおもに手工業の徒弟であつて、市門の警備兵はもう時代おくれであつた。市当局者は市民自体による見張りという帝国都市時代の制度を回復したいなどと考えたが、この重要な問題についての結論はまとまらずに終った。しかしこのときのリストの立場は、のちに一八一八年六月の *Volksfreund aus Schuaben* に彼が書いたところから知ることができる。彼はそこで、市の警察員と国家警察員とによる秩序の維持はいついかなるときでも、「市民の自由とはけつして両立しない」と述べたのであつた。⁽³⁾

討議は一日休んで四月二十九日（月曜）にはいる。この日は市の旧債務の一つを記帳からはずすこととしたのち、多数の乞食のための労役場施設をつくることがリストから提唱され、これに対して市当局者は、ナポレオン戦争中は孤児院の維持が不可能だったこと、孤児たちが市から有償で里親へ出されたという処置の結果が乞食の増加であること、昔の孤児院は手工業の親方たちに良い徒弟を供給したこと、市としてはこの問題に犠牲を惜しまぬつもりであること、などを答えている。⁽⁴⁾ロイトリングンに貧民・孤児院が再建されたのは一八二〇年のことであつた。

リストはつぎに、道路の維持についての市と領地所有者とのあいだの義務分担の範囲を明らかにさせようと努力したが、まったく市の負担に属する道路については、二十六日のリストの提案にしたがつて、租税未払者をその維持の勞働に徴用するのが適當だということになった。固定給の道路責任者の任用、エヒャッツ川の川床の復旧（*Etter (s)*）（?）内の建物、水溝、泉、街路、鋪道等の年一回の検査、なども実行されるべきこととなつた。

そのつぎの議題は市の吏員の報酬という微妙な問題であつた。リストは混乱した実情に対して固定給の実施を主張

したが、定められた枠以外の各種の仕事には特別手当の必要を認め、また上級職が吏員の仕事を合理的に配分して事務のいたずらな引き伸ばしを妨げることが必要であるとした。これに関連して、軍隊の屯営の場合の経費などについて市の書記職をつくる書類の簡素化が問題となり、五冊一〇〇枚から成る書類が、合理的に配分された時間内に市の吏員がおこなえばその十分の一の分量ですむはずだということになった。さらに、一方での租税の金納化の方向に対応する吏員への現物での支払いの現金化の問題が採りあげられ、リストはぶどう酒や果実での支払いを現金化するさいの基準を示し、市側の一致した承認をえた。なお、リストは市の書記職と裁判官との報酬の支払責任者がどこであるかをたしたが、前者は郡であることがわかったものの、後者については知る者がなかった。森林局が従来におこなっていた支払いは、市長のもとでおこなわれるべきことが諒解された。

以上で、第四の議題、すなわち市政の内部組織の改善についての討議は終った。この討議の内容と進行のありさまとから知られることは、リストが熱意をもって合理的、近代的、徹底的な改革を提唱したことであり、また市当局者側が、個々の点については修正を求めながらも、根本的にはすすんでリストに同調しようとしたことである。「リストが中央政府からの派遣者でありながらも市当局者よりも市民大衆に接近していたことは、森林盗伐の問題や市民税↓居住税の問題に処した態度からも知られるが、この討議での正面の戦線が、郡ないし郡長官と書記職とに對する、リストと市当局者との連合から成っていたことは明らかであり、その背後に、憲法闘争におけるヴュルッテンベルク王国の近代化への努力があったこともまた看過できない。」

討議は議題の第五、すなわち当時のリストの専門領域であり、彼が一八一五年の十月に自治局の命令に應じて詳細な文書をすでに提出し、その成果を公認されていた、計理事務ないし計理方式の整理と組織とにすすんだ。リストは

かねて準備のできていた基礎帳簿の範型を示し、租税収入簿の範型をも示したが、後者によると、従来の二五〇〇枚のものが、それに加えた四〇〇枚の総計表をも合わせて、わずか三〇〇枚でたりるのであった。彼はさらに十五年以上にわたる収納が一覧できる様式の帳簿や、従来のものの九分の一の量で明確にわかる器材の目録や、おなじく十分ノ一でたりる地代簿、合理的な盗伐罰金簿、負債利子簿などの範型をも示したが、これらは古い書記的方法の根本的廃棄の方向を明示するものであった。市当局者は書記の抵抗をおそれつつも、リストの提案をよるこんで制度の改革に賛成した。

おなじ日に、第六の議題である市政事務の合理的組織化の問題も採りあげられたが、これは市の書記制度の問題なのであった。さきに知ったように、四月十八日の自治局の訓令の第二のものは、書記職の権限と収入との保証されるべきことを述べていたから、リストはまずそのことに出席者の留意を求めたが、市当局者はただちに一致してこの訓令に反対し、書記制度こそ市政の「すべての悪の根元」だと主張した。そうして結局、中央政府に十年來のロイトリンゲンの大きい無秩序をうたえて市が独自の措置をとれるように望むことが、当局者の義務であること、書記の仕事に合法的に要求を出すことができるようにならなくてはならないことが、市の側の意見として提出された。この時点まで平静にまた事務的に進められてきた討議が、ここで突然けわしい空気をつくりだし、そのことが、ロイトリンゲン市の耐えてきた苦悩を示している。リストはこの苦悩のはげしい表白を煽動する必要はすこしもなく、ただそれを有効にまとめあげさえすればよかったのであった。

(1) ロイトリンゲン市はネッカー川の橋から通行税をとっていた。

(2) städtische Fuhrgeschirr, sog. Weinwägle, Blockwagen などと表現されているものの形体はわたくしには不明であ

るが、市有の運搬車であることはたしかである。

(3) リストは前掲の「ヴァルデンブーフ上申書」では、テュービンゲンにかんしてではあるが、「なんの目的で警察兵の半個中隊もが数千グルデンの経費をかけて市壁の上を哨戒しているのか」と述べている (Gehring, *Fr. List*, S. 402)。

(4) しかし或る医師の記録によれば、ロイトリンゲンの孤児院では一八〇五年に三十人から四十人の児童が羊毛加工の仕事 (Wollarbeiten) に従っていたが、彼らの大部分は劣悪な労働条件のために肺をわずらい、また皮膚病にかかっていたとのことである。

(5) リストが一八一七年にテュービンゲン大学の教授に任ぜられたとき、その俸給は一二八九グルデンであったが、このうち三七三グルデンだけが現金で、そのほかの部分は現物給与、すなわちライ麦五シエップフェル、小麦六〇シエップフェル、燕麦一六シエップフェル、えんどう豆一〇 Simri (この単位名称不明)、扁豆四 Simri、ぶどう酒二七〇リットルであった (Gehring, *ibid.*, S. 177)。ちなみに、リストは会計官としては最終には一二〇〇グルデンの俸給を受けていたのであって、大学教授としてはじめに提示されていた俸給はそれ以下のものであった (*ibid.*, S. 176)。

(6) Vgl. Gehring, *ibid.*, S. 75.

五

討議は最終日の四月三十日になった。議題は前日から引きつがれたが、市当局者の一致した要望にもかかわらず四月十八日の訓令が書記の立場を守っている点にくつがえせないことだったから、リストはまず市の書記職にその収入の計算の基準を知らせるように求めることとした。そうしてから、彼は市政についての新しい着想を開陳したが、それは二つの部局を必要とするというものであった。その一つは経常の収入と経費との計算をおこなうものであり、もう一つは債権債務の取立てと支払いとおこなうものである。そうしてこれらの事務は、帳簿に年々の期間を設けて仕事の成果を明らかにし、それをもとする評定によって修正を加え、責任者(第一のものはBürgermeister)に固定

給をあたえるべきものとされていた。市の計理にかんしては、その検査のための部局(Rechnungs-Prob-Behörde)が必要であることをリストは提言した。すでに一八一一年に、王は各郡に会計検査官をおくことを定め、この職が計理の当事者——たいては市の書記職——に異議を申し立てうることにしていた。リスト自身も、母の没後の相続税の決定にさいして、ロイトリンゲンの検査官シュルダー(Scholder)の恩恵をこうむったことがある。しかし彼は、テュービンゲンで勉強中のころにはこの制度に賛成していたにもかかわらず、この一八一六年の七月—九月に *Württembergisches Archiv* に発表した „Gedanken über die württembergische Staatsregierung“ では、この検査官の仕事が多すぎ、俸給がすくなく、独立性も十分でない⁽¹⁾と述べていたのであつて、ロイトリンゲンでの討議の経験が彼にこの新しい判断をもたらしたものであることはたしかである。こうして、討議は市が独自の会計検査官を選びたいという結論に達したが、それはシュルダー個人への反対のためではなく、計理事務の遅滞の打開のために当面の責任者父ヴンダーリッヒと協力できる人が必要だったからであり、またここでも書記職というものの機能を奪うことが望まれたからであつた。とくに年々の市税の率の決定には、知識があつて地位を保証された人物を市自身で持つことは、市民層の要求するところであつた。そうして、現在おこなわれている七十冊以上の租税簿が書記職から新しい検査官の手に渡されて整理されることを要望しつつ、市当事者はその場合に書記職に対する補償は不必要だと言明した。——リストはつづいて、租税の支払猶予や減免の承認のために市当局者の会議を月に一回開くべきこと、将来定められるべき市の検査官は市当局者の会議に出席すること、彼は右の月例の会議には議長となるべきこと、等を提案した。ここで、助手のシュトライヒは書面を提出して討議の中断を求め、今回の討議のために書記職に要請した書類が六回も督促してはじめて提出されたこと、それによって当委員会の仕事が妨げられたことを報告し、彼が支

払わなければならなかった右の手数に対して特別の報酬を要求した。それは承認された。

こうして討議は最終の議題、すなわち負債支払計画の立案にはいった。しかしこの議題は、市の積極・消極の財産がはっきりつかめない現状なので、リストはこれまでの討議でこの問題に関連した諸点をふりかえるにとどめた。これで討議の実質は終わった。

ただ、四月十八日の自治局の訓令の第二には、リストがロイトリンゲン市当局者たちについての調査や、彼らの収入、親戚関係等々を、また市長ヴンダーリッヒについてはさらに、彼の市に対する貢献、彼の老齢化が仕事に怠慢をきたしてはいないか、老齢化に見合うだけの俸給の減額が実行されているか、等々の些事をしらべて報告することが求められていたため、リストは討議の最後にこのことを採りあげぬわけにはいかなかった。訓令のこの要求は郡長官ファイエル⁽²⁾の運動に帰すべきであると思われる。そこでヴンダーリッヒは退席したが、座に残った市当局者たちは、一般の負担の大きい市長が計理の全体を一人では処理できないこと、しかもヴンダーリッヒの年齢⁽³⁾にとっては仕事⁽⁴⁾が軽減されるべきこと、彼の俸給は高すぎないこと、彼は悪事をしたことがなく、故郷の町のために長いあいだ忠実につくした⁽⁴⁾こと、などを証言した。——討議の終りに、リストの諮問にに応じて、負債支払いの事務のために助手のキーフスが一致して推された。彼は市の書記職を二十五年にわたって経験していた男である。討議の記録には、ヴンダーリッヒと十二人の市当局者 (Senator) たちが署名している。

ロイトリンゲンへ派遣されてリストのおこなった討議と提案と指示とは、正味一週間をついやして以上で終わった。われわれがすでに知っているように、リストと市当局者 (と郡長官) とに与えられていたものは審議の権限だけであ

って、その報告書にもとづいて新しい決定を下すことは中央の官庁の保留するところだったが、リストと市当局者のあいだに意見の一致が見られてしかも各種の法規に違反しない範囲内での多くの改革案については、市の側にその実行の道義的義務が残ったわけである。リストは四月三十日には早々にシュツットガルトにもどったが、彼の代理兼助手に任ぜられていたシュトライトは、五月の中旬に、討議で同意に達した二十二点にわたることがらの実行を市当局者に督促している。そのなかには、市の貯蔵木材の管理の改善、水車施設や狩猟小屋の売却条件の検討、水利の改良の立案、塩倉庫の使用料の取立て、救貧料の一部の金納化のための評価、果実およびぶどう酒の十分の一税の金納化に関連する処置、森林荒らしにかんする新しい立法、道路舗装費の調達の見直し、運搬車の廃止、道路の維持とエヒヤットの川床の拡張のための新措置、市吏員への支払形態の現金化、裁判官への支払責任者の明確化、等々のものがふくまれている。この事實は、リストの努力が急速には実を結ばなかったこと、市当局者はリストに同調しながらもリストほど改革の実行に熱心でなかったこと、また古い制度の壁がきわめて厚かったこと、などを物語るであろう。もとよりリストはこの事態を見つづけていた。彼と一般市民層との直接のつながりは、こうして、憲法闘争の進行につれて深まらざるをえなくなるのである。

青年期のリストとロイトリングとの関係は、したがってむしろ右の討議以後「ロイトリング請願書」にいたるまでのあいだに、いっそう広い政治的・思想的展望のなかで継続されてゆくこととなる。ゲーリング教授の当面の論説は、この点についても新資料にもとづく興味ある叙述をその末尾に展開しており、わたくしは後節でみずからの視野を拡大しつつ、そのなかでこの部分をも紹介するつもりであるが、ここでは、ロイトリングでのリストの討議の全体をゲーリング教授が伝記者としてどう評価しているかを読者に伝えておくこととしよう。

教授の述べるところによれば、討議の期間をつうじてリストと市当局者のあいだには終始建設的な対話があり、後者と一般市民層との対立は諸問題の中心点では示されてい⁽⁸⁾ず、彼らすべてに対する郡長官および市書記職の確執が示されている。ロイトリンゲンの郡および市の代表書記は一八二二年以来プファイルシュティッカー (Fr. Gottlieb Pfeilschicker) であったが、その収入は巨額の役得をふくめて「王侯のような」額に達し、これによって彼は大きい社会的影響力をも保持していたが、リストはファイエルに対したと同様に、プファイルシュティッカーをも個人的には攻撃せず、改革すべき対象そのものに正対した。地方の官職の合理的編成はすでに二年来⁽⁷⁾リストのたえざる関心事だったのである。それゆえリストはこの機会に、市の書記制度と計理制度とを自由で近代的な形式に改めようとし、のちの生涯に一貫して示された先見性と予言性とを、二十七才のこの年にすでに実証しているのである。彼のおこなった、俸給の金納化の提言も、彼の完全な創意ではなかったとはいえ、既述(前節注(5))のようなテュービンゲン大学教授として彼の受けた俸給の内容に照らしても、たしかに嶄新なものであった。市有の水車小屋その他の諸施設の処分についても、リストと考えをおなじくする人々はもちろんいたが、リストはそれだけでなく、市域の拡大、市の工業の発達と福祉の増大、新建設の進行を予見し、一八一〇年に八二九二の人口をしか持たなかったロイトリンゲンが、やがてみずからの市壁をみずからの発展の障碍と感ずるであろうことを見ぬいたのであった。それは市当局者たちをはじめにはしりごみさせた着想⁽⁸⁾だったのである。第二次大戦の戦火をこうむるまでの工業都市ロイトリンゲンの都市計画は、このリストの着想からはじまったといえるであろう。

- (1) 検査官の任免は王がつかさどったが、上司への申し立ては郡長官を経ておこなわれなくてはならなかった。
(2) Vgl. *Lists Werke*, I, SS. 132—33.

(3) 父 J・L・ウンダーツヒは当時四十五才であつて四年後に没してはいるが、年齢が問題となつてゐるのは解しがたい。

(4) 一八二〇年の領邦議会の選挙に、リストがウンダーツヒに敗れたことが思ひおこされる。

(5) すでに紹介した部分が些事にわたりすぎたことをわたくしはおそれているが、当時の西南ドイツの地方都市の行政がそれによつていくらかでも具体的に把握されたならば、まったく無用な叙述ではなかつたであらう。この地域のこの時代のマニユファクチュアの検出という作業などにあたつては、ここで示された都市行政の実態との整合が考慮に入れられなくてはならない。

(6) これは、直前の本文でわたくしの判断をしるしたところとはわずかにずれがある。

(7) 一八一四年、内相ライシャハあての原稿。『若きリスト』に付録第二として収録。

(8) 以上のことが指摘されたについては、ゲーリンク教授の当面の説論が *Reutlinger Geschichtsbilder* のためのものであることに留意されたい。